

日本における看護学実習に関する現状分析：グループを対象とする教授活動に関する文献の検討

著者	水口 陽子
雑誌名	学長特別研究費研究報告書
巻	14
ページ	59-60
発行年	2003-06
その他のタイトル	Analysis of Current State of Research on Clinical Practice in Nursing in Japan : The Document is Examined concerning The Education Activity for The Group
URL	http://hdl.handle.net/10631/495

新潟県立看護大学学長特別研究費 平成 14 年度 研究報告

日本における看護学実習に関する研究の現状分析
ーグループを対象とする教授活動に関する文献の検討ー研究者 水口陽子
新潟県立看護大学 (実践基礎看護学)Analysis of Current State of Research on Clinical Practice in Nursing in Japan
: The Document is Examined concerning The Education Activity for The Group
Yoko Mizuguti
Niigata College of Nursingキーワード：看護学実習 (clinical practice in nursing), グループ学習 (group study),
教授活動 (education activity), 文献(document)

目的

看護学教育において実習は学生が基礎的な看護実践能力を習得する場として大変重要であり、適切な教授活動が必要である。実習における教授活動は個別指導の他に、カンファレンス、グループ学習等のグループを対象とする教授活動があり、学生が学びを共有することで大きな学習効果が得られると考える。指導力を高めるためには教育実践を重ねると同時に、研究の蓄積による現状や課題の把握が必要であると考え。そこで、本研究は看護学実習に関する文献の中で、グループに対する教授活動に関する文献に焦点を当て、研究の現状と課題を明らかにすることを目的とする。

研究方法

1. 対象文献については、医学中央雑誌 Web 版及び CD-ROM 版を用いて、1988 年～2002 年の 15 年間に発表された文献を「看護学実習」「実習」「実習指導」「カンファレンス」「実習 and カンファレンス」「実習 and グループ」等のキーワードで検索する。さらにグループを対象とする教授活動に関する文献を抽出する。

2. 分析方法

1)抽出した文献について、研究対象、研究方法、研究内容の観点から分析フォームを作成し、研究内容に関しては、内容の類似性の観点からサブカテゴリーに分類し、さらにカテゴリー分類する。

2) D.F.ポーリット, B.P.ハングラの著書¹⁾を参考に研究方法について分析する。

結果

1. 研究の全体的動向

1)キーワードで検索した看護学実習におけるカンファレンス、グループに関する文献の総数は 78 件であり、「実習におけるグループを対象とする教授活動の研究」46 件、「実習におけるグループ学習活動の実態の研究」12 件、「実習グループ関係に関する研究」20 件であった。

2. 実習におけるグループを対象とする教授活動の研究についての研究対象・方法、研究内容

1)本研究の目的である教授活動に関する該当文献 46 件を年代別にみると、1988～1992 年は 14 件 (30.4%)、1993 年～1997 年は 16 件(34.8%)、1998～2002 年は 16 件(34.8%)であった。

2)対象は、対象学生等の所属別では、看護系大学 7 件(15.2%)、看護短期大学 16 件(34.8%)、看護専門学校 16 件(34.8%)、その他 7 件(15.2%)であった。実習領域別では、基礎看護学実習 7 件(15.2%)、成人看護学実習 12 件(26.1%)、成人・老年看護学実習 3 件(6.5%)、母性看護学実習 1 件(2.2%)、小児看護学実習 2 件(4.4%)、精神看護学実習 2 件(4.4%)、地域看護学実習 2 件(4.4%)、領域別実習 7 件(15.2%)、記載なし 10 件(21.7%)であった。

3)方法は質的研究 29 件(63.1%)、量的研究 10 件(21.7%)、質量併用研究 7 件(15.2%)であった。研究デザイン別では、調査研究 12 件(26.1%)、評価研究 7 件(15.2%)、準実験研究 3 件(6.5%)、方法論的研究 1 件(2.2%)、事例研究 1 件(2.2%)、グラウンデッド・セオリーによる研究 1 件(2.2%)、その他の研究 21 件(45.6%)であった。

4)内容は「実習におけるカンファレンスの検討」「実習におけるグループ学習の検討」のカテゴリーに分類された。各カテゴリー・サブカテゴリーと文献数は表1の通りである。

表1 研究内容の分類 N=46 (%)

カテゴリー	サブカテゴリー	文献
実習におけるカンファレンスの検討	カンファレンスの言動分析	11(23.9)
	授業分析方法の検討	1(2.2)
	カンファレンスの教授方法の工夫	17(36.9)
	カンファレンスの評価	4(8.7)
	カンファレンスの教授行動の構造・意義	3(6.5)
実習におけるグループ学習の検討	グループ学習の効果	8(17.4)
	グループ学習の構造・意義	2(4.4)

考察

研究方法では、質的研究が多かったが、言動の分析や教授活動の構造を解明するためには、重要な研究方法であり、今後も研究の継続が必要であると考ええる。

研究対象の設置主体別で看護系大学が少なかったのは、1990年代初めまで看護系大学が10校程度であった実状を反映していると思われるが、その後、急激に増加した大学に所属している研究者による専門性の高い研究が課題である。実習領域は各領域にわたっており、成人看護学実習が多かった。成人看護学実習等の医療施設内の実習では指導体制及びカンファレンス方法について吟味していることが反映していると推察される。一方、地域看護学等の実習は医療施設とは異なる実習の場の特性をふまえた指導が必要となる場合があるので、これらの領域の研究の蓄積が必要であると考ええる。

「カンファレンスの教授行動の構造・意義」「グループ学習の構造・意義」の研究は、カンファレンス、ふりかえり学習、グループワーク等の教授活動の場面を分析していた。それらの場面では、教員及び臨床指導者と学生、学生間などの複雑な関わり合いの過程が存在し、テーマも様々であるので、どのような教授学習活動を展開しているかについて記述的に明らかにする必要があり、研究の積み重ねが必要であると考ええる。「カンファレンスの言動分析」は学生の発言、教員及び臨床指導者の発言を対象に分析した研究があった。分析の視点は発言に注目しており、表現を導く認識はほとんど言及されていなかった。また、実習目標達成のために指導者の発言が学生の認識をどのように発展させていったかという両者の関連を明確に検討した研究が少なかった。「カンファレンスの教授方法の工夫」「グループ学習の効果」の研究は、カンファレンス展開方法やグループ学習の方法、指導方法を工夫し、学生の学習結果からその効果を検討しており、教育的観点からみても重要である。しかし、学生の学習状況の実態調査にとどまっているものもあり、研究手順の精度を高め研究成果を蓄積していく必要があると考ええる。「カンファレンスの評価」は学生の達成度・自己評価、指導者の評価と様々な面から評価されていて、指導方法の改善に向けて検討されていた。しかし、評価方法の妥当性の検討も必要であると考ええる。

結論

1. 看護学実習におけるグループを対象とする教授活動は、「実習におけるカンファレンスの検討」「実習におけるグループ学習の検討」のカテゴリーに分類され、前者は「カンファレンスの言動分析」「授業分析方法の検討」「カンファレンスの教授方法の工夫」「カンファレンスの評価」「カンファレンスの教授行動の構造・意義」の5側面、後者は「グループ学習の効果」「グループ学習の構造・意義」の2側面から研究が行われていた。
2. 実習におけるカンファレンス及びグループ学習がどのような教授活動を展開しているのかについて構造的に解明し、教育上の意義を明らかにしていく研究の継続が必要である。
3. 「カンファレンスの言動分析」「カンファレンスの教授方法の工夫」「グループ学習の効果」「カンファレンスの評価」は教授内容や指導法を考える上で教育的意義が高く、研究手順の精度を高め、研究成果を蓄積していく必要がある。

文献

1)D.F.ボーリット, B.P.ハングラウ. 近藤潤子監訳. 看護研究 原理と方法. 東京: 医学書院; 1994. p. 90-137.